



## 一貫コース通信

### 秋は読書に絶好の季節

灯火親しむの候は、秋の枕詞のように用いられるが、意味は読書の秋を暗喩している。空の高みと相まって、感覚が研ぎ澄まされて行くこの時期、読書に勤しむことは理に合っている様に思う。もっとも季節に関係なく本に接する人も居るが、俚諺には時間を越えただけの意味が在り、あながち捨てたモノではない。有体に言えば集中力が強まるのだ。殊、私の場合は、ジャンルはどちらかと言えば文学を、それも頁数の高む本を手にする機会が増す。恐らく文学は論理よりも、感性や創造力に阿るからだと思う。また、文学は人を、それも内面の揺らぎを主とするので、自分自身の振り返りには欠かせないモノとも思うのだ。

最近読んだ本で、頁数だけ競うなら宮城谷昌光氏の『三国志』がダントツ1位である。単行本で12巻、関連を足すと14巻になる。実は若かりし頃に、『同名』(6巻)の吉川英治氏著を読んだ。『三国志』の入門書的位置づけの本だが、御多分に漏れず諸葛孔明と、その仲間達に焦点が当てられていた。それに引き換え、宮城谷氏の著書は数多く登場する英雄の中でも、曹操が主役だが、彼は、武将であり、策略家であり、また、文人でも在った。娯楽の少なかつた時代に著された吉川三国志は、解り易く面白いが、歴史的背景や当時の文化等、総合的(学術的にも)包括では、宮城谷三国志には及ばない。登場人物一人ひとりの魅力も然りで、一人に掛けられる頁にも大きな開きが在る。思うに、元々ヒトの一生を書物で書く事など不可能である。従って、人の一部(時期・性格・過程・エポック…)を強調して描かれる事が多く、以外は対象外に成ってしまう。そんな中、仮に一人の人物を描こうと思うなら、少なくとも14巻位は必要だと云う事なのだと思うのだ。道は逸れるが、以前、三国志の主役は果たして誰なのだろう…と考えた事が在ったが、今は紛うことなく曹操だと答えるだろう。

さて、私は古い人間なので、読書を好む。日常の情報源は、当然ネットではなく新聞だが、補足の為に定期購読している雑誌がある。具体的には、『ニュートン』・『致知』・『文藝春秋』の月刊誌だが、それ以外にも気になった本は購入し、月に数冊は読んでいる。

所で、私はコロナ禍の情報の殆どを、これらのモノから戴いた。その知識はただ雑然とでは無く、サイエンティストの端くれとして、自分流に整理され脳内に収まっている。今般、コロナ禍の罹患者の1日当たりの数が一時の5000人規模から、僅かの期間で10分の1位まで減り、今日からこれまでの制約が解除される。この根拠のエビデンスを示せていない政府の対応が取り沙汰されているが、歴史には類似の前例が無い訳ではない。例えば、人々を恐怖のどん底に陥れたペストが、なぜ急に終息したかの理由は実は解っていないのだ。ただ明らかな事は、ヨーロッパ・中央アジアや中国でも、地域、年代の違いを越えて、ペストの猛威が忽然と無くなる事象を、事実(Fact)として記録している。こんな知識も、書物に接する内に、いつの間にか自分の中に足されて居るのだが、これも読書の良いところである。

